

楽しかった体育祭もあつという間に終わりを告げ、暦もついに10月に突入した。淳は体育祭が終わってからというものの、今週末にある慎の親友の結婚式のことばかり考えていた。やはり、豪華客船というものにとっても惹かれているからだ。もちろん、今月中旬にある試験のことや、能力の修行についてもある程度は考えていたが、しかし、それほど深刻に考えてはいなかった。

ほかの事は一切忘れていたといってもいい。
そう、ほかのことはすべて……。

「たのしみだな。いよいよ明日か」

土曜日、授業が終わりいつもどおり雄二と修行の前に学食でお昼を取りながら、淳は期待の言葉を口にする。

「ああ。きっと美女もたつくさんいるんだろうな」

雄二もこれに当然、となずく。

二人はしばらくの間、明日の結婚式について話していると、

「あ、そういえば」と今朝から気になっていたことを淳は思
い出す。

「そういえばさ、今日慎先生の様子変じゃなかった？」

「変？」

淳に言われ、雄二は思い返す。「ムムム、そういえばそう
なような」と雄二はあいまいな記憶を反復してみるが、思い
だしてみると確かにそうだと淳に同意した。

「やっぱり、おかしいよね」

「ああ。なんか心ここに少しあらずって感じだったな」

雄二は目の前のカレーライスに口をつけ、ペットボトルの
お茶を一口飲み込むと「でも、明日パーティがあるんだから、
そのことで頭がいっぱいだけじゃないか？」と思いついた
ことを口にしてみた。

「そう、かな」

確かに雄二の言うことは現実味があり、正しそうであった
が、「でも、なんかそういうのとは違ったような……」と首
をかしげた。

「ま、気にしてもしやあないっしょ。明日、本人に直接聞い

てみればいいさ」

雄二はスプーンで淳を指しながらそう言った。どちらにしてもそれほど深刻なことではないのだろうと思った淳もこれにうなずき、日替わりラーメン大盛りに口をつけるのだった。

「しっかし、よくお前そんなまずいもん食えるよな」

「え、そう？ おいしいよ、このラーメン」

「ああ、そう。じゃあいいですよ」

雄二は「はあ、あ」と肩をすくめ、そして「売店になんか買いにいつて来るな」とカレーで満たせなかった空腹を満たす新たな食べ物を探求しに言った。

「あ、じゃあ僕雪見大福」

「へいへい。分かりあしたよ」

淳は雄二にお金を渡し、その姿が見えなくなるまで後を目で追った。

「ここが、指定の場所か」

土曜日の夜遅く。いや、もうすでに時計の短針も長針も12の数字を当に過ぎており、時間的にはもう土曜日ではなく日曜日といったほうが良い。そんな深夜に慎は一人で港に来ていた。

結婚式があまりに楽しすぎて、早く着すぎたというわけではない。むしろ、懸念事項があったからこそ、いまここにいる。

懸念事項。

そう、彼は彼の友達の情報屋から、結婚式の会場である豪華客船の停泊している港のすぐそばで、ある組織が何かを起こすということを知っていたのだ。

『でも、この情報、怪しいよ』

慎は情報屋の言葉を思い出す。

『まず、場所の情報が漏れているのに対して、何をやるのかという情報がないなんてありえない。普通、情報が漏れるときは、全部セット……とは言わなくても、それに関連するいくつかの情報もセットで漏れる。』

それにね、情報がここまであからさまに漏れるなんてこと、ありえない。この情報、かなり広範囲で流れている。これはどっちかかっていうと、自分たちからもらしてると見たほうが自然だ』

「つまり、畏か」

『おそらくはね。でもその場所は司さんとフィーさんの結婚式の船が停泊している港だからね。君に伝えておいたほうがいいと思って』

「ああ、ありがとうな」

『やっぱり、行くのかい？』

「当然でしょう」

『わかった。でもほぼ間違いなく畏だからね。気をつけて』

「畏、か」

慎はあたりを見回す。今は誰もいる様子がない。そもそも、この情報、内容は場所だけで、誰、何時、何をやるか等すべて分かっていない。

明日結婚式が行われるから用心をして今まで見回った。だ

が、すべての区画を丹念に調べて、そのうえで誰かがいる様子は微塵もなかった。つまり、誰かが何かをたくらんでいることは本当かもしれないが、それは今日や明日の事ではなかったということだ。この様子ならば明日は大丈夫そうだ、慎はそう判断し「ふう」と一息つく緊張の糸を切り、そして「さて、じゃあ明日の待ち合わせ時間までどうしようかな」と終電がもう終わってしまったために帰れない状況をいまさらながら考え始める。

だがしかし

これが

いけなかった。

「っ!!！」

突然、腹に激痛が走る。

「この感触……」

誰かに、撃たれた。

慎は痛みで思わずその場に座り込み、同時に腹を手で押え

ると血が噴出していることに気がついた。

「ちっ」

緊張を解き、油断した瞬間にやられた。慎は「くそ」と悔やんだが、今は悔やんでいる場合ではないとすぐさま思考を切り替え、「だが見回ったときには誰もいなかったはず」と思い返した。

「そうだ。誰かがここにいて、何かをたくらんでいたのだとしたら、俺が発見していたはずだ。俺が先に敵に発見されたから、攻撃された？ いや、それはありえない。だとしたら、俺がすべての場所を見回す前に攻撃しないと遅すぎる。

そう何かをやっているその場所を、俺がたどり着く前に、たどり着かないようにするために攻撃する。これが条理だ。だが、今回は違った。俺はすべてのところを見回った。そしてそこで何かを巧らんでいるやつらがないことを確認した。だからこそ、緊張を解いた」

慎はほぼ一瞬でここまで推察すると、「いや、待てよ」とある考えに達した。

「つまりは、ターゲットは俺、か」

そう、これはやはり罠であった。

何者かがこの場所で何かをたくらんでいるとターゲットを誘導し、そして実際には何もなかったと油断させ、そこを突く。

よって、ターゲットは情報のある程度入手することができ、ある程度以上の力を持ち、さらに近日この場所でなにか大切な邪魔をされたくはない用事があるもの。

「その通り。つまりは君に仕掛けた罠だ」

慎の前に男が立ち、慎の考えが正しいとうなずいた。この男、大柄であり、目つきが鋭い。かなりの殺気の持ち主で、彼が今までに何人も人間を殺してきただろう事が伺える。これは罠である可能性も十分あると分かっていたはずなのに。

なのに、最後の最後で油断してしまった。

いつも直さなくてはいけない悪い癖だと反省しているのに……。

いまさらながら、遅い後悔が胸を締め付ける。だがそんな感情も、腹から来る激痛の前ではかすれて消えていってしま

った。

「ちなみに、君がこの港に入ったそのときからずっと後ろをつけていた。君がそういういった感覚に鈍いのは有名だから知っていたが、まさかここまでとは思ひもしなかった」

男は抑揚なく、また表情も一切変えずに、言う。そして言いながらおもむろにしゃがみ、右手に持ったサイレンサーつきの銃を慎の額に当てた。

「その傷では満足に動けまい？ さようなら、だ。赤い死神」

男がトリガーにゆっくりと指をかけ、

そして

引く。

「ああ、さようならだ」

その瞬間慎は

否

その付近全体が

闇に包まれる。

漆黒の

闇に

「なんだ、これは！」

男は思わず立ち上がり、周囲を見回す。そして「まさか、貴様がやったのか。そんな傷で！」と慎に再び拳銃を向けた。
「ちっ」

しかし、再び拳銃を向けられるほんの数秒前に慎は最後の力を振り絞って逃げ出していた。だから、男が向けた拳銃の先には、もう誰もいなかった。

男は拳銃を構えたまま、すぐにズボンのポケットから携帯電話を取り出す。

「おれだ！ 赤い死神が逃げ出した。あの傷だからそう遠くへはいけないはずだ。すぐに探し出せ！」

男は周りに隠れていた自身の部下にも「聞いていたな、お前たちもすぐに追え！」とどなる。

そこへ部下の一人が「しかし、我々ではあの赤い死神には

……」と臆病風に吹かれたのか、おそろおそろといった形ではあるが、いやだという意思を示していた。するとリーダーたる男は拳銃をその男に向け、

ダン

トリガーを引いた。

「ひ」

銃弾はその男の頭を掠め、後ろの壁から大きな音を響かせる。

「行かなくてもいい。ただし、地獄に行くことにはなるかもしれないがな」

リーダーは先ほど一瞬取り乱したのが嘘のように、感情も抑揚もまたなくしていた。

「それに考えても見ろ。もしもやつにそれほどの体力があるならば、ここから逃げ出さずにここにいる全員すべてを排除していけばよかった。やつにはそれほどの実力が本来ならばあるはずなのだからな。

しかししなかった。これがどうしてか、貴様も分からないということはないだろうか？」

「わ、わかりました。い、行って参ります」

男がようやく他の人間を連れてそこからでるのを見て、リーダーはすぐに他の部下たちにも命令を下す。

「すぐに見つけてこい。生死はとわない。いいな、速効出だ！」

だがしかししばらく探しても一向に見つかる気配がなかった。銃弾は慎を貫通していたから、血がどこかにたれていてもおかしくはなかったが、その痕跡すらなかった。

「確かやつ有能力は……」

リーダーは思い出す。慎の能力のことを。確かに彼の能力ならば、ここからすぐにも逃げることはたやすいだろうということに。

「しかしあの傷だ。致命傷といってもいい。やつならばあの傷を治すことはできるだろうが、明日はさすがに間に合うまい。

ならば、ここでやつに固執することもない。明日さえやつ

が来なければ計画は実行できる」

そこまで考えて、彼は部下たちに一通り見終わったら帰ってくるように命令を下す。

「まったく、斬虎のやつがあんなへまをしなければ、こんなことをわざわざする必要もなかったのに」

男はそう愚痴をこぼすと、部下たちの帰りをまった。

「はあ、はあ」

しかし慎はそんな彼のすぐそばにいた。彼がいるのは、リーダーのいる広い倉庫の、一つのコンテナの中だった。外からは頑丈に占められており、だからこそ、彼らの誰もがそんな中にいるとは想像していなかった。たしかに、リーダーが先ほど言ったとおり、慎の能力を使えばここから遠く離れた場所にいくことはできた。だが、その能力はいま慎が持っている漫画のどれでやったとしても、致命傷を受け体力がほとんどなくなっている彼では使えない、もし使えても使っただけで力尽きるものであった。故に、彼は物体をすり抜ける能

力くらいしか使えず、だが、すぐ近くにいるはずはないという心理を逆手にとり、そこが絶好の隠れ家になることを確信していた。

「しくつたな。せめて優希といっしょに来れば……」

慎はそこまで考えて、しかし敵の量がかなりいたことを思い出す。どうやら外の様子を伺ってみると、少なく見積もっても30はいるみたいだった。つまりは周到に用意された計画。もしも優希とともに来ていたとしても、今度は別の方法でやられていたかもしれない。もちろん、そんなことは分からない。だから、こんな考えはせん無きことだと、思考をストップさせる。

そして慎はポケットから携帯電話を取り出し、それをライト代わりに使って彼のビジネスバッグから、ある漫画を取り出した。

何のために？

無論、回復のために。

今の体力では、最上級の回復能力は使えないが、致命傷とは言っても即死レベルでもないし、幸い血もあまり流れ出て

はいない。故に傷だけ直せばいいという観点から、彼は中級の回復魔法を選択し、そのページを開く。もちろん、この魔法でもかなりの体力は使うから、使った瞬間気絶するだろうし、とうぶんは起きれないだろう。しかし、なりふり構っていられる状態ではない。

慎は「いい、結婚式になることを祈っているよ」と今日おこなわれる結婚式にいけないことを残念がりながら、能力を使い始めるのだった。